

子どもの“自律”と“共生”を育む

イエナプラン教育を取り入れた学校づくり

中央教育審議会の答申^{*1}で示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる教育のあり方の1つとして注目されている「イエナプラン教育」。最大の特徴は、画一的な教育ではなく、子どもそれぞれの「個」を尊重しながら、「自律」と「共生」を育む点だ。本企画では、イエナプラン教育の解説とともに、2022年4月、広島県福山市に開校した公立初のイエナプラン教育校と、その理念を取り入れて学校づくりを進める愛知県名古屋市の公立小学校の実践を紹介する。

解説

イエナプラン教育は「方法」ではなく「コンセプト」 大切なのは、目の前の子どもに合う形での実践

イエナプラン教育は、ドイツの教育学者が1924年にイエナ大学の附属校で創始し、1960年代以降、オランダで進展していった。2020年度時点で、オランダには200校以上のイエナプラン教育の小学校がある。

イエナプラン教育の根底には、人種や国籍、性別、社会的背景などにかかわらず、一人ひとりがかけがえない価値を有し、尊重され、自分らしく成長していく権利を持つといった考えがある。それを体現する学校が目指す方向性の最低限の要件を「**8つのミニマム**」にまとめ、教育のコンセプトを「**20の原則**」に記した^{*2}。

それらのビジョンは、次のような教育活動で具現化される（図1）。まず、活動は異学年による集団で行い、授業は科目ではなく、**対話・仕事・遊び・催し**の「4つの基本活動」から成る。活動内容は子どもたち自身が決め、仕事（学習）では、「**ブロックアワー**」で個別に学んだり、「**ワールドオリエンテーション**」で協働的かつ探究的に学びを深めたりしていく。教員はあくまでもファシリテーターであり、尊重されるのは子ども

の自発的で責任ある行動だ。活動の過程では、個の学びが大切にされる一方で、学年を超えた協働的な学び合いが自然と生まれ、違いを尊重する心が育まれていき、子どもは社会に主体的にかかわりながら生きていくための自律と共生を身につけていく。

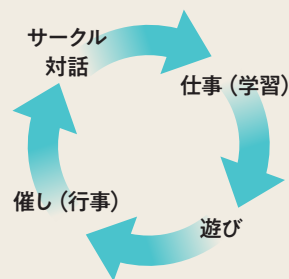
重要なのは、「**イエナプラン教育は、方法ではなくコンセプト**」と言われるように、それらの特徴的な教育活動をそのまま取り入れるのではなく、目の

前の子どもに合う形で実践する点だ。

そこで、日本でのイエナプラン教育の発展・普及に尽力している「日本イエナプラン教育協会」では、「20の原則」の解釈などについて対話をしながら学ぶ勉強会を全国の公式学習会・サークルで開き、各自の教育活動に取り入れられるよう支援している。自治体からの問い合わせも増えているといい、イエナプラン教育の考え方を取り入れた教育実践が広まりつつある。

図1 イエナプラン教育の主な特徴

グループ構成	活動の基本単位となる集団は、1～3年生、4～6年生という、異学年の子どもで構成される。
4つの基本活動	授業は、科目で区切らずに、「対話・仕事・遊び・催し」の4つの基本活動が、リズムカルに循環するように企画される（右図）。
サークル対話	円座になり、全員の顔が見える形で行う対話。互いを尊重する文化を育む場にもなる。
ブロックアワー	子どもが自分で計画を立て、自らコントロールしながら学ぶ時間。
ワールドオリエンテーション	子どもたち自身の内発的な問いに基づいて探究し、仲間とともに学ぶ協働活動。



仕事（学習）は、日本での授業に近い活動で、催し（行事）には、学校行事に加え、誕生日のお祝いなど、喜びや悲しみなどを一緒に分かち合う活動などがある。

※日本イエナプラン教育協会の提供資料を基に編集部で作成。

* 1 2021年1月に公表された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）。

* 2 詳しくは、日本イエナプラン教育協会のウェブサイト参照。<https://japanjenaplan.org>